

三浦市立上宮田小学校

研究テーマ： 自他の良さに気づき、考え、行動できる子
～道徳の授業を軸とした自己肯定感を高める指導の工夫を通して～

1 実践の目的

本校の教育目標は、「自立・貢献」である。この教育目標には、子どもたちには、たくましく生きぬく「自立」の力と、他者や社会に「貢献」する心と力をもってほしいという願いをこめている。この教育目標の具現化に向けて、目指す児童像として、以下の2つを掲げている。

- ・自分を好きになり、自分を高める子
- ・ほかの人を認め、ほかの人を大切にする子

しかし、実態としては、自分とは異なる他者の言動を受容できなかつたり、周りに影響されて自分の考えで行動できなかつたりするという課題があった。

これらの課題を解決するために、児童の自己肯定感を高めようと、上記のテーマを設定した。

2 実践の内容

(1) 校内研究について

児童の自己肯定感を高めるために、道徳の授業と、他教科や総合的な学習の時間、特活等との関連を図りながら、様々な活動に取り組んできた。特に今年度は、50周年記念行事として全校発表やPTA行事などを実施したこともあり、学校行事や特別活動の中でも、児童が自らの良さに気づき、他者のことを認められるよう指導してきた。

授業研究会では、道徳の授業を中心として、全員が授業を公開した。研究授業をする際には、各学年部で検討・協議を行い、成果

と課題を出し合った。また、低中高の3ブロックから1人ずつ全体公開授業をし、それぞれの発達段階においてどのような指導や活動が有効なのかを全体会で協議した。

(2) 研修について

各全体公開授業の指導案検討と協議会、教員研修に、神奈川県教育委員会の指導主事を講師として招聘した。年間を通して、道徳の授業づくりや協議会の在り方等について、継続的に助言を受けることができた。

また、夏休みには、教員同士で上宮田小学校の課題解決のための研修会を行った。

3 実践の成果

日々の授業や50周年記念行事をはじめとする学校行事等で、テーマの達成に向けて意識して取り組んだ結果、児童が主体的・協働的に行動する姿が多く見られた。学級活動での成功体験は、児童の自己肯定感を高めることにつながったと感じる。

研究の軸としていた道徳の授業においては、これらの学校生活と関連させながら、道徳的価値について理解を深めたり、自己を見つめたりする授業づくりを意識することができた。「この行事の前後で」「クラスづくりと関連させて」等、道徳の授業をどう学校生活と関連づけるかという教員の意識が高まってきたように感じる。また、昨年度までに研究していた思考ツールを活用することで、児童の思考を深めることもできた。

授業について全教員で話し合うための時

間の確保は容易ではなかったが、年間で3本の授業について、指導案検討会と授業後の協議会を研究全体会として開催したことで、道徳の授業づくりについて学ぶことができた。

また、その場に継続して助言して下さった指導主事の存在は大きかった。本校の児童の実態と教員の思いを汲み、寄り添いながら指導して下さった。そのおかげで、教員も楽しみながら道徳の授業について考えることができた。

「道徳が楽しい」と言う児童が増えたり、温かい雰囲気の中で活発な意見が交わされることがあったりと児童の変容からも研究の成果があったことを実感する。自分自身について考えることを積み重ねることで、より自己肯定感を高め、他者を受容しながら、よりよい学校生活を送れるようになる。より多くの児童がそんな好循環を起こせるようにしたい。



全体公開授業の板書

4 今後の展開

学校生活と関連を図ることで、児童は道徳の授業に主体的に取り組むようになっていった。また、日々の学級活動が充実していると、より対話的な授業になる。そして、教師が道徳的価値について考え、授業のねらいを明確にもつことで、深い学びが生まれる。

「特別の教科 道徳」において、「主体的・対話的で深い学び」を実現するためには、道徳の授業と他教科や総合的な学習の時間、特別活動などを関連付けることが有効であると感じた。

そこで、来年度も道徳の授業の研究を進めていく。今年度の実践を参考にしながら年間指導計画を作成し、どんな内容項目について、どんな教材で、どんな他の活動と関連付けて指導するのかに着目して研究を進めたい。また、今年度も思考ツールで児童の考えが深まったり、役割演技を取り入れることで考えが広がったりした。それらの実践を生かしながら、次の実践に繋げられるようにしたい。

全員が同じ方向性で研究を進めていけるよう、来年度も、また代表者による授業も実施し、指導案検討や協議会を全教員で行い、授業力の向上に努める機会としたい。

ただ、今年度、計画的に研究を進めることができなかったこともあった。他教科などとの関連をどのように図ればよいのか、道徳の授業と自己肯定感がどのように関わっているのか、そして、本校が目指す子ども像を、より明確に教員で共有し、よりよい実践に繋げなくてはならないと感じている。

今年度、道徳に対して、児童も教員も前向きに捉えて、進めることができた。この前向きな雰囲気で、来年度以降も研究を進めたい。